

アモス書4章12節 「あなたの神に会う備え」

1A 災いにある悔い改めの機会 6-11

1B 気づきを与えようとされる方

2B 明らかにされる品位

2A 「あなたの神」の御姿 13

3A 神に会う備え

1B 終わりの日の申し開き

2B 賢い者

3B 神の用意された方

本文

アモス書 4 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは先週で、アモス書 3 章まで来ました。今日は午後礼拝で 4 章から 6 章までを一節ずつ読みます。今朝は、4 章 12 節を中心に見ていきたいと思います。「**それゆえ、イスラエルよ、わたしはあなたにこうしよう。わたしはあなたにこのことをするから、イスラエル、あなたはあなたの神に会う備えをせよ。**」

あなたの神に会う備えをせよ、であります。私たちがこの言葉を聞くと、聖日の礼拝のために、神に会う備えをしましょうというように聞こえますね。前の日は、いつもよりは早めに寝て、心を整えて教会に行くために家を出るというように聞こえますが、それは意味が違います。ここでの文脈は、「良いことも、悪いことも、すべてのことを知っておられ、裁かれる神に会うことができるよう、備えなさい」という意味です。伝道者の書の最後にこう書いてあります。「12:13-14 神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」私たちがどんなに人には罰せられず、自分の隠れて行なったことを隠し通せたとしても、全権を持っておられる天地創造の神が、正しくそれらのことを裁くのだということです。その備えができていますか？ということでもあります。

1A 災いにある悔い改めの機会 6-11

北イスラエル王国が、その歴史の中で最も栄えていたのが、ヤロブアム二世の時であることを私たちは学んできました。南ユダ王国のウジヤが統治しているのと合わせると、ソロモンが王であった時のイスラエルと変わりなくなっていました。しかし、その時に北イスラエルは、その富の中に溺れて、偶像礼拝に陥り、偶像礼拝だけでなく、貧しい者を虐げ、自分たちだけが贅沢をしている生活を送っていました。そこで、ユダ王国にある片田舎テコアにいる、一人の羊飼いであるアモスを主が取り出して、彼に獅子が吠えるような預言を行わせました。このままで行ければ、必ずイスラエルの国は滅びるという宣言でした。そして事実、預言から約 30 年後、その首都サマリヤはアッ

シリヤによって陥落し、人々はアッシリヤに捕え移されました。

1B 気づきを与えようとされる方

この前の学びで、災いにしても何もしても、神は預言者によって示すまでは何もしないということを学びましたね。「3:7 まことに、神である主は、そのはかりごとを、ご自分のしもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさない。」主は必ず前もって警告を与えられます。何も知らないままで、災いを下すことはありません。そして無意味に災いを下しません。下す時には、神は目的をもって下しておられます。

主が、一人一人の人生の中に、各人が主に会うようになる前に、必ず、ご自身に立ち帰ることができるようにするための徴、あるいは注意喚起をしてくださっています。最後の審判において、死んだ者たちをみな甦らせ、そして行ないの書にしたがって、その行なったことを裁かれる前に、主のもとに来ることができるように、いろいろな徴を与えておられます。気づきを与え、もしそれに耳を傾けるなら、気づくことができるようにしておられます。イスラエルの民が、主が預言によって語られているのに全く意に介せず、ひたすら自分の好んでいることを行なっているのに、主が彼らに少しずつ示されました。

まず 6 節、パンに欠乏させました。「わたしもまた、あなたがたのあらゆる町で、あなたがたの歯をきれいにしておき、あなたがたのすべての場所で、パンに欠乏させた。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。」ところで、イスラエルには神の教えが与えられていました。そして神の教えに聞き従わない場合、これこれのことが起こると前もって告げられていました。申命記 28 章にあります。パンに事欠くようになることも、その中の一つにあります。ですから、彼らは、神とその教えを知らない民ではなく、知っているはずの民ですから、今、自分たちの身に起こっていることは、神からの何かの語りかけだと気づくはずですが、ところが、彼らは気づきませんでした。「それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。」と言っています。

次に、「自分の町だけが水不足」状態に陥りました。7-8 節です。「わたしはまた、刈り入れまでなお三か月あるのに、あなたがたには雨をとどめ、一つの町には雨を降らせ、他の町には雨を降らせなかった。一つの畑には雨が降り、雨の降らなかった他の畑はかわききった。二、三の町は水を飲むために一つの町によろめいて行ったが、満ち足りることはなかった。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。」水に事欠いているのに、それでも主を求めることがありませんでした。「何か大変になったなあ」とぐらいいか思っていなかったのでしょうか。そして次に、「立ち枯れとイナゴ」の災いです、9 節です。「わたしは立ち枯れと黒穂病で、あなたがたを打った。あなたがたの果樹園とぶどう畑、いちじくの木とオリーブの木がふえても、かみつくいなごが食い荒らした。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。」穀物が、立ち枯れと黒穂病にかかりました。そして果物は、イナゴが食い荒らしました。それでも、この災いの中に神を見いだして

いません。そして次は「疫病と外敵」です、10 節。「わたしは、エジプトにしたように、疫病をあなたがたに送り、剣でああなたがたの若者たちを殺し、あなたがたの馬を奪い去り、あなたがたの陣営に悪臭を上らせ、あなたがたの鼻をつかせた。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。」このような惨敗は、まさに彼らを虐げていたエジプトが神から受けていた仕打ちでした。これを思い出してもよからうものを、思い出しませんでした。私たちが悔い改めない時に、救われる前と同じような状況に自分が陥っても、それでも悔い改める必要があると気づかない、ということです。そして 11 節、「町に火が降って来る」災いです。「わたしは、あなたがたをくつがえした。神がソドムとゴモラをくつがえしたように。あなたがたは炎の中から取り出された燃えさしのようであった。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。」町に火の粉が上がり、ほとんど全焼してしまったのに、ソドムとゴモラに対する神の災いを思い出しませんでした。

それで、彼らが悟らず、主のもとに立ち帰らなかったのも、「あなたの神に会う備えをせよ」と言われています。神の怒りの手の中に入るということでもあります。

2B 明らかにされる品位

私たちに苦しいことが起こる時に、または災いが降りかかってくる時に、主が何かを語っておられて、そのことを許されています。そこで、自分が試されます。自分の人格や信仰の深い部分が試されます。火の中を通るようにして練られます。そこで、自己憐憫に陥って落ち込んでみたり、怒りを貯めたり、苦々しく思うのであれば、状況は悪化するばかりです。カインが自分の捧げた作物が受け入れられず、落ち込んで怒っているのを主は指摘されました。それにも関わらず、カインは悔い改めず、それで弟アベルを殺してしまいました。そしてカインの子孫を始めとして、暴虐に暴虐を重ね、彼らの神に会うことになったのです。つまり、地上を全て覆う水です。

しかし、主の前にへりくだることができます。自分自身を探ることができます。「詩篇 139:23-24 神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」その中で、主との深い語らいの時を持つことが出来るでしょう。これまでできなかった、自分の肉の思いが強くてできなかった神との交わりを持つことが出来るでしょう。その辛さは、神の聖さにあずかるためのものであり、平和と義の実を結ばせるものであることが分かります。「ヘブル 12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」

2A 「あなたの神」の御姿 13

主の語りかけを最後まで拒んでしまうと、その拒んだままで神の前に現れなければいけなくなります。神はどのような方でしょうか？ 13 節を読みますと、次のようにあります。「見よ。山々を造り、風を造り出し、人にその思いが何であるかを告げ、暁と暗やみを造り、地の高い所を歩まれる方、

その名は万軍の神、主。」

「山々を造り」出されています。つまり、偉大な力を持っておられる方です。だれも抗うことのできない、不動の力を表しています。どんな者も逆らえない権威を表しています。イエス様は、「神を信じなさい。・・山に向かって、『動いて、海にはいれ。』と言って、心の中で信じて疑わず、ただ、自分の言ったとおりにになると信じるなら、そのとおりになります。(マルコ 11:23)」と言われました。神を信じるということは、山々を造られた方を信じるということです。そして、どのような神に会うかといえば、「風を造り出」す方に会います。風は、大気中のものを全て動かすことのできる力を与えます。風によって、雲が形成され、そこにある水分が固まりとなり、雨となり、地上を潤します。そして川となり、それが海に戻り、蒸発して天に上がります。もし風、空気の動きがなければ、それらのことは一切できません。今、45年前に月面上に宇宙飛行士が着陸した時の足跡が残っていると言われますが、一切、風が吹かないからです。つまり風は、私たちに命を与えます。実に、ヘブル語では風と「息」と「霊」は、同じ言葉です。いのち、息、そして霊的な命である霊を与えられる方です。今、息をしているその瞬間、瞬間を神によって生かされているのだということです。

そして、「人にその思いが何であるかを告げ」と言われます。そうです、神は人の人生の初めから終わりまで、ゆりかごから墓場まで、いやゆりかごの前から墓場の後まで、全てその時に思ったこと、語ったこと、行なったことについて知っておられます。人には知られずに、隠れて行っていたことも全て知っておられます。「詩篇 139:1-4 主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそ私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。」そして、私たちは自分自身をもさえ誤魔化すことができます。自分はこう思っていると心底信じていたとしても、実はそうでなかった、こんなことを思っていた、ということを神は何であるかを告げることができるのです。「ローマ 2:15-16 彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。・・私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。」

そして主は、「暁と暗やみを造」る方です。これは、「あけぼのを変えて暗やみとな」すということです(口語訳)。太陽が上ろうとしているのに、暗闇にすることができるということです。最近、アメリカで皆既日食がありました。真昼なのに、一瞬にして暗くなりました。そして、日本では今年の夏、夏なのに豪雨と共に、雹も降りましたね。神は、ノアの時以来、昼と夜、春夏秋冬を与えておられますが、しかしこの周期をいつでも変えることができる方です。そして私たちの目には光が入ってきます。これを聖書では、比喩的に自分に与えられた希望を指していることがあります。自分はこれでやっていける、これで安泰だというような希望的観測を、一気に真っ暗にすることもできる

のだ、ということです。そして、「地の高い所を歩まれる方」です。主は、どんな高い所よりも、なお高いところにおられる、いと高き方です。日本もそうですが、高い山の上には祭壇や宮がありますね。そこから人々を、領域を支配していると考えています。聖書では、「いと高き所」とあります。けれども、そこを歩まれる、いや、ここは踏みつづすというような意味があります。

そして、神は「万軍の主」です。この軍とは、天における軍勢であり、天使たちのことです。目に見える領域における主権や力、支配だけでなく、目に見えない領域においても、偉大な力を持つ存在です。聖書によれば、ペルシヤやギリシヤのような世界の大国をも一人の墮落した天使によって支配されている様子がダニエル書 10 章にあります。そして、天使が、イエス様が復活された後に墓のところに来ましたが、その時に大きな地震が起こり、墓の石を脇へ転がしました。ローマの兵士が震え上がって死人のようになったとあります(マタイ 28:2-4)。そのイエス様は、ご自分を捕えに来た者たちに剣をもって対峙したペテロに対して、「剣をもとに収めなさい。…わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下においていただくことができないとも思いませんか。(マタイ 26:52-53)」と言われています。一軍団、レギオンは、六千人の構成なので、十二軍団は、7万2千の天使のことを意味しています。一人の天使が力ある存在なのに、無数の天使を指揮している方だということです。

3A 神に会う備え

1B 終わりの日の申し開き

ですから、私たちは各々が、自分の神に会う備えをしないとはいけません。そこで考えないといけないのは、この方に敵対したまま、歯向かったまま、御前に行くことができるのでしょうか？耐えきれないことです。北イスラエルの人たちは、その神の御力の一部の現れであり、アッシリヤによる攻撃と捕囚を受けざるを得なくなりました。そして終わりの日、地上において神が怒りを下される患難時代の時に、人々が、洞穴と山の岩間に隠れて山や岩に向かってこう言います。「黙示 6:16-17 私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」耐えられないはずです。しかし、私たちは神の前で自分のことについて、全てを申し開きしないとはいけません。「ヘブル 4:13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」これから免れることはできません。自分は死んで、それで終わりではありません。死んでもその後、裁きが定められています。「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている(ヘブル 9:27)」神は必ず各人を復活させ、最後の審判において各々の行ないに応じて裁かれるのです(黙示 20:11-15)。

2B 賢い者

そこで、神に会うことになるのだということを知って、備えをする人たちを聖書では、「賢い人たち」の括りに入れてあります。イエス様が、ご自分が戻られる時、そこには忠実な思慮深い僕と、悪い僕

がいることを話されました。主人に任されて、僕が食事時に人々に食事を出します。主人が戻って来た時に、きちんと食事を出しているのを見られるのであれば、彼に全財産を任せると言われました。けれども、悪い僕は、「主人はまだまだ帰るまい」と思って、その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めたと言われます。そして、主人が、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来て、彼を厳しく罰し、その報いを偽善者たちと同じにすると言われます(マタイ 24:45-51)。主人がいつもいるのだ、いつでも戻って来られるかもしれないのだと思っている態度。これは、主がいつもおられ、いつでも戻って来られるのだという信仰をもった態度です。このことをしている人は、主が戻られた時に良い忠実な僕とみなされます。主がまだ戻ってこないと考えている人は、

もう一つ「賢い乙女と愚かな乙女」の喩えを語られました。十人いたのですが、花婿が花嫁を迎えに行き、それから花嫁を連れて自分の家に連れて行く時に、光を灯しながらその行列について行くのがそれら乙女の役割でした。待っていたのですが、夜になってしまいました。しかし、五人の乙女は油を用意していたので、眠ってしまっていたのですが、花婿が来た時にそのまま参列することができました。けれども、愚かな乙女は油が切れてしまっていたので、油を買いにいったら行列に加わることができませんでした。それで、花婿の家の祝宴の場のあるところに行ったのですが、戸が示されています。「確かなところ、あなたがたを知りません。」と断られました(マタイ 25:1-13)。用意しているか、そうでないかで、その人の運命は 180 度変わってしまうのです。

私たちは、自分の人生や生活については絶えず用意をしています。保険もその一つですし、生活設計、会社の生活、いろいろなことで将来のことを考えて用意します。けれども、不可抗力というものがありますね。自分が何をしたところで、何ら変わらない力がこの世界にはあります。寿命もその一つでしょう。愚かな金持ちの喩えをイエス様が語られて、彼は自分の畑が豊作だったので、作物を蓄えるための倉庫を建て直すことに決めました。そして、穀物と倉庫はそこに入れて行こうということにして、それによって、これから先何年分も安心して、食べて、飲んで、楽しめ、とやりました。すると神が彼に言われたのです。「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。(ルカ 12:20)」自分のことについて、いろいろ用意するのですが、人生において自分の命、生き方、全てを司る方に会う用意をしていないということが、往々にしてあります。

3B 神の用意された方

では、どのように用意したらよいのでしょうか？一言でいえば、アモス書にも出て来ること、「悔い改め」です。万物を造られ、支配しておられる方の元に立ち帰ることです。イエス様は、「悔い改めなさい。天の御国は近づいたから。(マタイ 4:17)」と言われました。ここで大事なものは、悔い改めと反省は違うということです。私たちは、反省することはとても得意です。こうしたことが悪かったから、だから直さないといけないと思います。何か問題が起こったら、その原因を追究して、その原因を取り除くべく最善の努力をして、再び過ちを繰り返さないように未然の備えもします。そうや

って、例えば日本の会社で造られた製品は世界でも定評であります。

けれども、悔い改めとは反省ではありません。自分に何が間違っていたのかと反省することは、言い換えると、「自分を変えれば、問題がなくなる」という前提があるからです。悔い改めというのは、自分を正したり直したりすることではありません。悔い改めというのは、二つのことを行ないます。「自分を正すことはできない、自分を直したりすることはできない。自分は、自分をよくするために何もできないのだ。」という自分への絶望を認めるということです。しかし、多くの人が自分に何かができると思っているので、自分が何もできない、救いようがないというところに立つのが恐ろしくて、後ずさりしてしまうのです。そこに、自信、自分が何とかできるという深い信頼があるからです。聖書では、「高慢」という言葉が出てきたらそれが定義です。「自分で自分を救うことができる」という自負がそうです。

そうやって生きてきた人に対して、イエス様はいつも、「ではそれを行なって見なさい」と勧めます。金持ちの青年に対して、「では、貧しい人に全財産を売って、それからわたしについてきなさい」と言われましたが、彼は悲しい顔つきで去っていきました。イエス様は、彼は自分で自分のことができないのだ、自分にはどうしようもない金銭への執着があり、金銭を自分の神としているのだ、という自分についての真実に直面したくなかったのです。その部分を隠して、親を敬う、嘘をつかない、姦淫をしない、その他の戒めを守って真面目に生きていました。神の目的は、私たちが自分を良くすることを求めておられるのではなく、神の憐れみにすがり、主に立ち返ることなのです。ですから、悔い改めとは第一に、自分は救いようもないことを認めることであり、そして第二に、もっぱら主の憐れみにすがり、この方を信頼して、この方のところに立ち戻ることであります。いつまでも、自分で自分のことをやっていたらそれは反省でも、全く悔い改めていません。自分から離れて、主を求めることが悔い改めです。

主は、私たちが私たちが救えないことを知っておられて、それでご自分の御子を遣わされました。「ヨハネ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」私たちは、十字架につけられた主イエス・キリスト以外を宣べ伝えてはいけません。なぜなら、私たちが何か他のことについて、これこれ間違っていると言って裁いたところで、私たちはみな墮落していて、直しようがないからです。「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハネ 3:17)」とあります。既に世は裁かれているのです。裁くためではなく、救われるためにイエス様は来られました。この方に自分の人生を明け渡す決断をすれば、その重荷と責任は、自分ではなく主イエスご自身になります。この方に従う生活に変わります。

私たちが神の前に立つ時に、この全能者、主権者なる王の前に立つ時に、そこには畏怖の思いはありこそすれ、恐怖とはなりません。なぜなら同じく義なる方であるキリストが、私たちの横に

立ってください、「わたしを人の前で認める者は、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。(マタイ 10:32)」と言われるように、「父よ、わたしはこの人を知っています。」と言い表して、認めてくださるのです。もはや、自分自身の負い目は責められることはなく、むしろキリストの義を身にまとい、キリストの義をもって私たちをみてください。キリストに結ばれたということは、このように偉大な恵みの真理なのです。